

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2022
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「はじめの一步」 オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

1. 『八月の暑さのなかで』ホラー短編集 金原瑞人・編訳 岩波書店 2010
2. 『南から来た男』ホラー短編集 金原瑞人・編訳 岩波書店 2012
3. 『最初の舞踏会』ホラー短編集 平岡敦・編訳 岩波書店 2014
4. 『小さな手』ホラー短編集 金原瑞人・編訳 岩波書店 2022

選者コメント

◆英語圏、仏語圏のいろんな短編が収録されています。19世紀の古いものから、つい最近のものまで。いわゆる古典的名作から現代の名品まで。このうち仏語編は平岡敦さん、英語編は金原の編訳です。怖い話もあれば、しみりする話もあれば、え、なにこれ！ という奇妙な話もあります。「不思議」って、よくわからないという人には格好の入門書。小学校高学年から大人まで楽しめます。

5. 『新編 怪奇幻想の文学 1』 牧原勝志・編 新紀元社 2022



◆昔、〈怪奇幻想の文学〉という全7巻のアンソロジーがありました。これは紀田順一郎・荒俣宏の編集によるちょっとマニアックな作品集で、「不思議」マニアにとっては格好の入門書だったのですが、長らく絶版のままでした。それをもとに、新たに選び直し、新訳で収録しようという企画の1冊目がこれ。全6巻になるとのこと。

6. 『吸血鬼文学名作選』 東雅夫・編 東京創元社 2022

◆ご存じ、イギリス吸血鬼物の先駆けである、バイロンとポリドリらの作品のほかに、フランスの作品もあります。訳者も佐藤春夫、芥川龍之介など、日本文学史でよくお目にかかる作家が手がけたものも。その他、須永朝彦、菊地秀行、江戸川乱歩、柴田錬三郎などによる創作やエッセイも収録。吸血鬼文学入門編としても読めるけど、マニアにもうれしい1冊。



選者：東雅夫氏（アンソロジスト・文芸評論家）

1. 『岡本綺堂読物選集 4 異妖編 上巻』 岡本綺堂・著 岡本経一・編 青蛙房 2009
2. 『岡本綺堂読物選集 7 翻訳編 上巻』 岡本綺堂・著 岡本経一・編 青蛙房 2009
3. 『岡本綺堂読物選集 8 翻訳編 下巻』 岡本綺堂・著 岡本経一・編 青蛙房 2009

選者コメント

◆今年は岡本綺堂の生誕150年のメモリアル・イヤーだ。岡山県の勝央美術文学館では10月に〈奇譚の神様〉と題する記念展覧会が予定されている（東雅夫監修）。青蛙房版〈岡本綺堂読物選集〉全8巻は、怪奇幻想文学入門を志す人にとって、真っ先に入手し、繰り返し読む必要のある好著好巻が多く含まれる、素晴らしい選集である。私はこの選集を中学時代に入手し、耽読し、今の仕事に就いた（笑）。その中でも、特に群を抜いているのが、この3冊だ。第四巻〈異妖編〉は『青蛙堂鬼譚』と『近代異妖篇』という綺堂のオリジナル怪談集の最高峰2冊を収録。戦前の日本で書かれた怪談の最高傑作とってよいだろう。第七巻〈翻訳編 上巻〉は、中国の志怪小説のアンソロジーとして最高の出来。国産怪談のルーツがここにある、といっても過言ではない。第八巻〈翻訳編 下巻〉は、『世界怪談名作集』で、英米作品を中心に、綺堂の名訳でたどる世界怪異巡りの趣。要するに、極上の日本語で書かれた、和・漢・洋の傑作怪談が、これら3冊に結集されているのである。とにかく読むべし、ページが擦り切れるまで、読むべし！

4. 『泉鏡花集成 5』 泉鏡花・著 種村季弘・編 ちくま文庫 1996



◆やはり基本は、端正で美しい日本語を、どれだけ沢山、若いうちに吸収できるかにかかっていると思うのである。その意味で、日本文学史上、もっとも優れた日本語の使い手のひとりとは、申すまでもなく、泉鏡花だ。岡本綺堂と並んで、日本幻想文学の最高峰に位置づけられるとってよい。泉名月さん記念文庫を有する田原市図書館にも、ふさわしいだろう。

膨大な鏡花作品の中から何を推すか、大いに迷うところだが、ここでは本書を挙げておきたい。鏡花が湘南・逗子に滞在していた時代に書かれた最高傑作——「春昼」「春昼後刻」と「草迷宮」という不朽の二大名作に加えて、水妖の影ただならぬ「沼夫人」、嗜虐趣味にあふれたフリーキーな「星女郎」という組み合わせは、息をのむほどに鮮やかだ。一語一語を噛みしめるように、じっくりと時間をかけて味わってほしい。本書を読み終える頃には、貴方の読書力は、着実に数段アップしているに違いない。

5.『死』 文豪ノ怪談ジュニア・セレクション 内田百閒ほか・著 東雅夫・編 汐文社 2019

◆自分の編著で恐縮だが、十代の読者に読まれることを前提に、鬼のように大量の註釈をつけて編纂・刊行した本なので、是非（第一期全5巻／第二期全3巻）。本巻は〈死〉という十代の読者にはいっけん縁遠いように感じられるテーマに沿った幻想文学作品が集められている。しかし、本当に、縁遠いのか？ 現代では〈死〉は、老いも若きも、分け隔てなく到来する問題である。しかも〈死〉について、人が真剣に悩み、考える時期は、実は十代ではないのか？ 三島由紀夫、芥川龍之介、川端康成、宮沢賢治ら、名だたる文豪たちが、迫り来る〈死〉と真剣に向き合って綴られたアンソロジーである本書によって、人類不変のこの大テーマについて、繰り返し、考えてみていただきたいと思う。



リストのタイトルは、田原市図書館で所蔵しています。 2022.10 作成